

# 夏目漱石『こころ』論

## 疑似家族の悲劇

柴研究室 四年 荒木鈴菜

はじめに

夏目漱石著作の『こころ』は、東西朝日新聞に大正三年四月二〇日から東京・八月一日、大阪・八月一七日の約五月間連載された作品である。その後、岩波書店により大正三年九月二〇日に当初サブタイトルであった「心」を全体の題に変更し、刊行された。作品は、上「先生と私」中「両親と私」下「先生と遺書」の三部構成となっているが、本稿では「先生と遺書」に注目した。

漱石文学には、作者の境遇や当時の時代背景とも関わり合いを持ちつつ、〈家〉〈家庭〉を主題にしている作品が多く認められる。そのことは例えば、次男を主人公とする小説が多いことや、また次男は長

男との間にながしかの葛藤を抱えているという漱石作品で繰り返される設定にその具体的な表れを見ることが出来る。

本研究で取り上げる『こころ』という作品もまた、〈家〉を主題とした作品であると言える。しかし、『こころ』における先行研究を顧みると、古くはエゴイズムという心理的テーマに焦点を当てているものが多く、また特に近年の研究は、教育教材としての『こころ』の立場について再評価されているものが散見されるものの、〈家〉という主題から考察をおこなっている研究はあまり見られない。

そこで本研究では、夏目漱石の『こころ』「先生と遺書」における〈疑似家族〉とでも言うべき関係性に着目し、当時の日本の〈家〉における家長の役割、

また長子とその他の男子の関係性をふまえながら分析考察をおこなう。また作中、〈疑似家族〉化のプロセスにおいて重要な役割を果たしている「食卓」(チャブ台)にも注目し、近代日本の家庭におけるチャブ台の意義を参照しつつ作品の読解を試みる。

また、〈チャブ台〉が置かれている〈茶の間〉という空間、そして、そこは対照的な空間である〈床の間〉に焦点を当て、作中にみられる間取りから「先生」と「K」の関係性について考察を行う。

なお、〈食卓〉の観点にいち早く論及したものとして、石崎等氏の御論<sup>(1)</sup>が存在するが、石崎論文における着想を承けつつも、更なる考察の深化、精密化を図りながら、本作における「K」の死に至るプロセスを、〈疑似家族〉のフレームそれ自体からもたらされた必然的な悲劇として読み解いていく。

### 『「ころ」 「先生と遺書」における〈疑似家族〉

「先生と遺書」は、語り手である「先生」によって、彼の学生時代の暗い過去について記されているパートである。したがって「K」の悲劇的な最期についても、読者は「先生」の告白を通じて明らかにされる。

「先生」と「K」の関係性や、下宿先の〈家〉の住民である、「御嬢さん」と「奥さん」と彼ら二人の関係性もまた、「先生」の視点から書かれている。

「先生」と「K」が住むことになる下宿先の〈家〉は、「それはある軍人の家族、というよりも寧ろ遺族、の住んでゐる家でした。主人は何でも日清戦争の時から何かに死んだのだと上さんが云ひました」<sup>(2)</sup>とあるように、当時の日本の〈家〉制度すなわち家長制からすると、本来存在するはずの家長といふべき者が存在しない欠損家庭である。家長は当時の日本の〈家〉において「家名の大切を思い、又、家人扶育の責務を思い、事ごとに謹み、且つ、励むは言うまでもなく、」<sup>(3)</sup>とあるように、その〈家〉の営みの中心に位置し、〈家〉にとつて欠くことのできない存在として定義されていた。

しかし、「先生」が下宿した〈家〉は、その家長となるべき男子を欠いていた。戦争未亡人とその娘からなる下宿先の〈家〉は、やがて家長となるべき男子の到来に対して潜在的に待機状態にある過渡的様相に置かれた〈家〉なのである。

そのもともと不安定な状態に置かれた下宿先に、「先生」、そして「先生」にいざなわれる形で「K」

という二人の男子が下宿人として参入することにより、この〈家〉は不可逆的な変貌を遂げていってしまう。それこそは、戦争未亡人である「奥さん」、その娘である「御嬢さん」、そして他者である二人の下宿人「先生」と「K」の四者による〈疑似家族〉の形成である。

## 『「こころ」における〈疑似家族〉の形成と「食卓」の意義

「先生と遺書」で書かれる先生とKの関係性は、当初、友人同士として設定されているが、下宿先の住人となった彼らの関係性は、やがて友人という関係のみならず、〈疑似家族〉としての関係性を帯びてくる。そしてそこには、作中に登場する「食卓」というアイテムが深く関与してくるのである。このことを石崎氏は「六畳の茶の間でちやぶ台を囲んで〈奥さん〉〈お嬢さん〉と一緒に食事をするようになったとき、そこには明らかに『客扱ひ』を越えた疑似家族関係が生じた」と指摘している。<sup>(4)</sup>

この石崎氏の論点を検証するに先立って、漱石文学に登場する「食卓」（チャブ台）とはどういうも

のか、顧みて置こう。漱石作品では、チャブ台は『門』と『行人』そして『こころ』に登場する。

『門』では、主に「宗助」とその妻である「御米」が食事をする場面で登場する。また、本稿で例として取り上げる場面は、作中で初めてチャブ台が登場した場面であり、「宗助」の弟である「小六」も登場する。当時の食事について論じている堺氏の文中では「食事の時は即ち家族会が開けたのである」<sup>(5)</sup>とあるが、この『門』における食卓を囲む食事の場面は、主に小六の養育費を議題として、家長である「宗助」と彼の弟である「小六」、そして「御米」との三者でまさしく家族会議が開かれている場面である。しかし、その家族会議は、厳粛で緊張した空気がというよりはむしろ、彼ら三人の会話の様子からは、和気あいあいとした雰囲気漂っている。それは家長である宗助が「ゴム風船の達磨」を面白がって膨らませて、二人に見せたり、三人で無邪気に長閑な話をしたりする様子から読み取ることができき光景である。『門』の中の食事の場は「家族団らん」の場であり、そこにチャブ台が置かれているのである。

また、『行人』における主人公の一家はチャブ台を使い、一同揃って食事をする習慣がある。

「一家團欒の時季とも見るべき例の晚餐の食卓が、一時期重苦しい灰色の空気で鎖された折でさへ、お貞さん丈は其中に座って、平生と何の變わりもなく、給仕の盆を膝の上に載せたまま平気で控へてゐた。(6)

これは、『行人』の〈家〉のなかで「下女」をしていたが、結婚を機に〈家〉から出て行つた「お貞」のことを、主人公であり、その〈家〉の次男である二郎の視点から回顧する場面である。「一家團欒の時季とも見るべき例の晚餐の食卓」とあるように、『行人』のなかでも「食卓」（チャブ台）が「一家團らん」の場として書かれている。

この二作品に共通して認められることは、その〈家〉の家族が揃い、家族会議が開かれ、あるいは「家族團らん」の時を過ごす場における、一種の象徴としてチャブ台がその中心に置かれているという点である。そしてこのことは『こころ』においても例外ではない。作中から、下宿先の住民である「先生」

「K」、「御嬢さん」、「奥さん」の四人が揃って会話する場面は、必ずチャブ台を囲む食事時なのである。

Kが下宿先へ来たばかりの頃、「先生」が、新たな参入者である「K」に配慮して、彼を「奥さん」「御嬢さん」と親しませるために四人で話をする、というような場面がみられるが、「K」が「内のもの」（御嬢さんと奥さん）と話すようになってからは、四人集まって話をする機会は専ら食事時となる。

しかし、四人による談笑は、下宿先の〈家〉で可能だったわけではない。四人による談笑しながらの食事光景をもたらしたのは、「食卓」（チャブ台）という、その〈家〉にそれまで存在していなかった道具なのである。そして、そのアイテムを導入した本人こそ、「先生」である。この「先生と遺書」において揃って会話する場面を作り出す「食卓」は、先生が「わざわざ御茶の水の家具屋に行つて、私の工夫通りにそれを造り上げさせた」(7)ものである。この「先生と遺書」の時代背景は、明治三〇年初頭であったと推測される(8)が、「今では何処の宅でも使っているようですが、そのころそんな卓の周圍に並んで飯を食う家族は殆んどいなかったのです」(9)とあり、当時はほとんど普及していなかった「食卓」

(チャブ台)を、「先生」はもともと家族ではない「先生」、「K」、「御嬢さん」、「奥さん」の四人の語らいの場をあえて創出するために、自らの考えでこの〈家〉に持ち込んだのである。

「食卓」(チャブ台)は、近代日本においてどのような意味を持つか。「食卓」(チャブ台)が日本の〈家〉に導入される以前、食事は銘々膳によるものであった。「男女別、長幼の別の原理をもつ座順にしたがつて膳をならべる食事は、家長を頂点とする『イエの制度』を反映するものであった」<sup>(10)</sup>。ところが、チャブ台は、食事という毎日繰り返される〈家〉における必須の営みの場に、家族関係に劇的な変化をもたらしたアイテムであった。チャブ台は、食事をする者が年齢や地位に関わりなく等しく、それを取り囲むようにして座るといふ関係性を生み出す道具であった。またチャブ台は、食事に就く人々の間の距離感を縮小し、互いに親しませ、先に引用した堺氏の文中にあるように「平民主義の美しい家庭」をもたらし得る画期的な装置であったのである。

このように「食卓」を囲む食事時の語らいが、四者の距離を縮め、〈疑似家族〉化をうながしていった。この、「先生」・「K」・「御嬢さん」・「奥さん」の四

者からなる新たな〈疑似家族〉として、この下宿先の〈家〉が再組織化されていく過程において、それを中心となつてプロデュースした「先生」は、実質的にこの〈家〉に〈疑似家族〉を司る家長的存在となつていたのである。「先生」は単に本来は他人である「奥さん」「御嬢さん」と〈疑似家族〉関係を結んだのではなく、「先生」は、みずからが意図的におこなつた「食卓」の導入という行為によつて、その〈疑似家族〉における潜在的な家長としての位置を占めることになつたのだ。

石崎氏は「先生が〈奥さん〉の家になじみ、まがりなりに家族の核とならざるを得ないとき、Kは不可避免的に排除されねばならない存在となる」<sup>(11)</sup>と指摘している。たしかに、「先生」が〈疑似家族〉における潜在的な家長になつたことこそ、実は「先生」と同じく〈疑似家族〉の一員であるはずの「K」の悲劇を招来する契機に他ならないのだが、そのことについての検証は次項に譲る。

『「こころ」における下宿先の間取り図から読み取れること

―〈茶の間〉と〈床の間〉のある室の対比

作中での〈茶の間〉の役割に関する考察の前に、当時の〈茶の間〉という空間がどういう空間であったか調査を行った。明治二二年刊行『日本辞書言海』での「茶の間」の項では、「人家ニ、家族ノ食事ナドスル室」とあり、同様に、明治二六年刊行『日本大辞書』での「茶の間」の項でも、「(一) 家族ガ食事ナドスル室。 Ⅱ 食堂。(二) 其茶ノ間ニイル下女。」とあった。<sup>(13)</sup>

また、明治四二年刊行『家屋と庭園』第七節

茶の間」には、「家庭と云ふ上から云つて必要なるは茶の間である、(…中略…) 茶の間は往々食堂と兼用さるることがあるから余り狭いのは、特に小児などのある家ではどうも不自由である、茶の間は或る意味では主婦の居間という傾きもあるから最も台所に接近して、加之も家中の見張りと注意の届くべき所が好い」<sup>(14)</sup>との説明がされている。以上のことから明治期の〈茶の間〉は、【家族が揃って食事をする場所、食堂】であると定義されていた。また、

『日本大辞書』に「其茶ノ間ニイル下女」とあることや、『家屋と庭園』に「茶の間は或る意味では主婦の居間という傾きもある」と説明されていることから、女性の仕事場としての意味合いも持っているのである。

漱石作品での〈茶の間〉も家族一同が揃う場所、また、その家の女たちが集う場所として書かれている。『行人』では、主人公の「長野二郎」と彼の妹である「お重」、長野家の下女である「お貞」の三人が、茶の間で大きな声を立てて笑う場面が描かれており、そしてその場には愉快そうに笑う「二郎の母」と嫂「直」も登場する。また、「家族団欒の季節である食事時」に一つの食卓を囲んで食事を行うが、その際使われる場所が〈茶の間〉である。

『「こころ」先生と遺書』に書かれる食事の様子は、各々別の部屋で食事をとっていた風景から、一室で皆が揃って食事をする風景へと変わっている。それは下宿先の新しい住人として加わった「K」が、早く馴染めるようにと、「先生」が食卓を持ち込んだためである。その「食卓」は家族が揃い、家族の語らいが生じる空間の中心に置かれているが、その空間こそ〈茶の間〉である。

ここから作中における〈茶の間〉の役割は、血縁関係がない彼らが一同に集い、食事をおこなう室としての役割であるといえる。「食卓」が四者の距離を縮め、〈疑似家族化〉を促していった事と同様に、〈茶の間〉もその関係性を促していったと考えることができる。

その〈茶の間〉とは対照的に位置する室が〈床の間〉のある室である。〈床の間〉とは神仏をまつる一番高いところという意味であり、家族だけが集う〈茶の間〉とは対照的な場を指す。〈床の間〉の「床」は書院造が始まって生まれたものであり、書院は禅宗の悟りをひらく空間である。〈床の間〉では、この書院の真ん中に仏をまつり、そこを一段高くして、香・華・燭をあげ、その後ろに仏画を掛ける。家の主はこの〈床の間〉のある室で勉強を行っていた。またこの室は、家主よりも身分の高い客を迎い入れるための室でもあり、床の間のある方を上座、その反対を下座とし、座順によって身分の違いを示していた。

時代が進むにつれ掛け軸や季節の花を飾り、風景として楽しむようになるが、接客空間としての機

能や、主人の勉強部屋としての認識は薄れることなく、明治期に入り、家長権が制度として取り入れ始めると、〈床の間〉のある室は主人⇨家長（父）の部屋として一般化されるようになる。

漱石文学では、〈床の間〉のある室は家長権のシンボルであったことを示すように「父の居間」として登場する。ここでも『行人』を取り上げると、「父は常に我々（母子）とは懸け隔った奥の二間を占領してゐた」<sup>(15)</sup>とあり、この「奥の二間」とは〈床の間〉がある室の事を指す。それは、この部屋で「父」が客人を招いて談笑している場面や、手紙を書いている場面に「床の前に：：」「床に活けた：：」という描写があることから判断することができる。

また『虞美人草』の中にも「宗近」と「宗近の父」が対面して会話する場面で、「茶がかつた平床には：：」という描写があり、その室が〈床の間〉がある室であることがわかる。この時、「唐机を控えて、宗近の父さんが鬼更紗の座布団の上に坐っている」なか「宗近」が「入口の唐紙をさらりと開けて」入ってくる描写<sup>(16)</sup>から「宗近」は入り口側に居り、彼と対面している「父」は床の間側に座っていると読み取ることができる。つまり「父」は上座に、「宗

近」は下座に在るといえる。

一方〈茶の間〉にはこの上座・下座が存在しない。そのため、座順によつて〈家〉の中でのヒエラルキーが示されない空間である。それと同時に下宿先の女主人とその娘と、二人の下宿人という枠を超えた関係性をみる事ができる空間であるともいえる。つまりこの点からも、〈疑似家族化〉を促していった〈茶の間〉の役割を考へることができらる。

〈床の間〉の話に戻すと、『こころ』『先生と遺書』では、「先生」に自分の部屋として「床の間」が与えられている。以下そのことを示す本文からの引用である。

室の廣さは八畳でした。床の横に違い棚があつて、縁と反對の側には一間の押入が付いてゐました。窓は一つもなかつたのですが、其の代り南向の縁に明るい日が能く差ししました。

私は移つた日に、其の室の床に活けられた花と、其横に立て懸けられた琴も見ました。<sup>(1)</sup>

その部屋が「先生」に与えられた背景には、「奥さん」が、亡くなつた夫の部屋であつた場所を下宿

所として「先生」に与へたことが挙げられる。

そのため「先生」がその下宿先の〈家〉にきたとき、家長がいた部屋を下宿人の「先生」が引き継いだ形となる。家長の象徴的空間としての〈床の間〉がある室が、「先生」に与へられたことから、潜在的な家長としての「先生」を読み取ることが出来る。

反對にKは、「最初は同じ八畳に二つ机を並べて、次の間を共有しておく考へだつた」が「狭苦しくつても一人である方が好いと云つて、自分で其方の方（控えの間というような四畳の間）を拵んだ。Kが自分から選んだ部屋といつても、そこは結果として「床の間」の「次の間」である部屋に移り住んだことになる。「控えの間」ともいわれるこの空間は、「床の間」と完全に切り離され場所というよりはむしろ、「床の間」に從属した空間であり、完全に独立した空間ではない。

この「先生」と「K」の部屋の違いからも、家長としての「先生」の立場とそれに從属する「K」という構図が読み取れるだろう。



## 〈長男〉としての「先生」、〈次男〉としての「K」

漱石文学では、次男が主人公になっている作品や、長男と次男が対立関係にある作品が多くみられる。それは、当時の家父長制が深く関わっているからである。明治期の家族制度では、第一子男児である〈長男〉が、家長である父の跡を継いで家の長となることが、家父長制として一般化されていた。そのため当時の日本の家社会において〈次男〉以降が跡を継ぐことは滅多になかった。<sup>18)</sup>

漱石文学でみられる〈長男像〉〈次男像〉はその社会的背景を示すかのように、次期家長として扱われる〈長男〉と、あくまで家族員として扱われる〈次男〉の扱いの差がみられる。そのため〈長男像〉、〈次男像〉とそれぞれの特徴がある。石原千秋氏は「長男の記号学」の中で「漱石文学にあつては、長男はむしろ見えない制度としてある」と論述しており<sup>19)</sup>、それは漱石文学で書かれる〈長男〉の問題の中に家督相続の問題が含まれているからである。

『坊ちゃん』では、〈長男〉である「兄」と〈次男〉である「坊ちゃん」の扱いの差は「おやじはちっともおれを可愛がつてくれなかった。母は兄ばかり鼻

厘していた」<sup>20)</sup>という文章からも読み取れる。次期家長となる「兄」には相続権があるため、彼らの家が続いていかせるためにも、「兄」の存在は「坊ちゃん」よりも優遇されるものとなる。実際に相続権を引き継いだ「兄」は、父と母が亡くなった後家を買ったが、その財産に関して「坊ちゃん」は詳しく知らなかった。「どうせ兄の厄介になる気はない」という「坊ちゃん」の言葉からも自立しなければ長男のお世話になるしかない次男の葛藤が読み取れる。

『こころ』の「先生」も例外ではない。他に兄弟もおらず、第一子である「先生」が本来相続する筈だった財産は、「先生」が未成年であったために「叔父」に騙され横領される。これをきっかけに「先生」は人間不信に陥ってしまうのである。このことについて石原氏は、「遺産を横領されたことは、ほかならぬ父の信用していた叔父に裏切られたということと同じ位の重さで、〈先生〉の心の傷となっているふしがある。家産を守ることは、長男の重要な役割だからであろう。」<sup>21)</sup>と論じられている。

また、当時の家制度に翻弄された者は「K」も同様である。真宗の家の〈次男〉であった「K」は兄よりも熱心な宗教心を持っていたのにもかかわら

ず、家を相続することができないうえに医者の家に養子に出される。それに反発するように養家からの学費を使い、医療関係ではない「先生」と同じ学科へ進む。そのことを自白してしまい、結局は生家からも勘当されることとなる。この出来事から、生家を相続することができない（次男）のただならぬ葛藤を読み取れる。彼ら二人のそれぞれの「家」での葛藤は、当時の家族制度で位置づけられた（長男）としての葛藤、（次男）としての葛藤である。

そしてこのような「見えない制度」の中の彼らは生家だけではなく、下宿先内でも見られる。それは、彼ら二人に対する「奥さん」の態度である。最初に下宿したのは「先生」であり、そして、「先生」が「K」を誘う形で、「先生」の次に「K」が下宿したが、その際「奥さん」は「K」に対して反対意見を示していた。以下、その部分にあたる抜粋である。

奥さんは私のこの処置に対してはじめは不賛成だったのです。下宿屋ならば、一人より二人の方が便利だし、二人より三人が得になるけれども、商売でないのだから、なるべく止した方が好いというのです。私が決して世話の焼ける

人ではないから構うまいというと、世話は焼けないでも、気心の知れない人は厭だと答えるのです。(22)

しまいに「奥さん」は「私の為に悪いから止せ」と言いだす。その様な「奥さん」を「先生」が説き伏せて「K」を下宿先に連れてくる。「奥さん」が「K」の下宿を拒んだ理由は、本人の言葉で明確に示されることはない。しかし理由として考えられることは、娘である「御嬢さん」の結婚問題だろう。

「K」が下宿先の一員になる前、「先生」と「奥さん」のやりとりの中で「御嬢さん」の結婚に関するやりとりがある。その中で「先生」は、「奥さん」が「御嬢さんを私に接近させようと力めている」と考え始める。この考えは「先生」の一人語りの中で語られるため、実際に「奥さん」が娘の結婚相手の候補として「先生」を考えていたかは定かではないが、「奥さん」が娘の結婚について考えていたことは事実である。それは、「奥さん」が「二三そういう（結婚に関する）話のないでもないような事を、明らかに私（先生）に告げ」たり、「御嬢さん」の結婚時期について「先生」に相談したりという二人のやりと

りから読み取れる。

もともと下宿先の家は家長となるべき男子の存在を欠いていた欠損家庭である。そこに親を亡くし、そして財産も叔父に横領され、相続する筈の家を失った「先生」が下宿することになる。「御嬢さん」と「先生」が恋仲になり、結婚することによって、お互い欠落した部分を補うことができる。当時の家族制度を念頭に考えると、「先生」と「お嬢さん」が結婚することは自然な流れであり、また、「先生」婿養子として「家」の一員となることで、欠落した不安定な状態を補い安定した家庭になるはずだった。しかし、そこに「K」が参入するのである。

家督を相続する筈だった「先生」は「奥さん」から親生まれ、「自分の親類みよりに当たる若いものか何かを取扱うように」待遇されるが、先述したように「K」は「奥さん」から下宿先の家庭に入ることを反対される。それは、次期家長候補としての「先生」の、家長としての可能性を危うくする存在を拒むための態度だといえる。つまり、下宿先内での不安定な家庭において、突如現れた「K」の存在は邪魔者であった。まさにここで見られる二人の性質は、漱石文学で見られる〈家長として優遇される長男〉と〈邪魔

者扱いされる次男〉である。血のつながりはないが、彼ら二人にはこのような性質がみられる。

また先に下宿人となっていた「先生」に導かれるままに、「K」は遅れて下宿人となった。この時に、もともと対等な友人同士であったはずの二人が、下宿先における先輩であり、兄的存在の「先生」、後輩であり弟的存在の「K」として順烈化されてしまう。こうして二人は、下宿先の〈疑似家族〉においても、〈長男〉∥「先生」そして〈次男〉∥「K」として再定位されているのである。

また、「先生」は、先述した〈疑似家族〉の形成についての項でも述べているように、「チャブ台」という道具を下宿先にもたらし、〈疑似家族〉化を主導した存在として、潜在的な〈家長〉としての役割を担ってゐる。それは、「先生」が下宿先内の〈疑似家族〉において欠くことのできない中心人物となっていることを表している。

その先生に対し「K」は、〈家〉における余計者、厄介者としての存在である。〈次男〉は〈長男〉と異なり、〈家長〉になることができない存在であり、やがては〈長男〉を中心とする〈家〉から放逐され

る存在であるとも言える。「K」は、先輩であり兄的存在の「先生」によって、この〈疑似家族〉の一員となることができたが、〈次男〉としての「K」にとつて、そこは安住の地となり得ないのである。

実の兄弟ではない疑似兄弟の関係性にある『ころ』の「先生」と「K」のあいだにも、この構図を読み取れる。

またこの関係性のもう一つの特徴として、〈欺き、騙す長男〉と、〈欺かれ、騙される次男〉という対比的な特徴がある。その特徴が現れている場面として、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」という言葉で、「先生」が「K」に対して発した状況を指摘することができる。「先生」は、「K」がこれまで積み重ねてきた「精進」という言葉に従った人生をあえてふまえて、「その一言でKの前に横たわる恋の行く手を塞ごうとした」のだ。そして「先生」からその言葉を言われた「K」は、「先生」の言葉を額面通りに受け取り、「僕は馬鹿だ」と繰り返すことしかできない。このようにして「先生」は自分の恋の障害となった「K」を「狼が羊の咽喉笛に食らい付くように」を「騙し討ち」にしたのである。ここには、「K」を「騙し討ち」にした〈長男〉Ⅱ「先

生」と、騙されるがままの〈次男〉Ⅱ「K」という対比的構図がみられる。

そして「恋の行く手を塞」がれた〈次男〉的存在の「K」は、この〈家〉を放逐される前に自ら死を選んではまい、〈長男〉である「先生」は予め定められていたものごとく「お嬢さん」と結婚し、潜在的な〈家長〉から現実の〈家長〉となっていくのである。

## おわりに

今回の研究では、「家」という観点から『ころ』の作品考察を行い、「先生と遺書」で使われる「チャブ台」というアイテム、そして「茶の間」という空間の機能について調査し、作中で書かれる下宿先の住人の関係性に「疑似家族」という関係性がみられることを明らかにした。

また、「茶の間」と対照的な機能を持つ「床の間」という空間について調査し、家長の居間としての「床の間」、そしてその場所を下宿部屋として与えられた「先生」と、その部屋に従属する形となる「次の間」を与えられた「K」の対比的構図から、彼ら二

人の従属関係を示した。

漱石文学にみられる〈長男像〉、〈次男像〉の特徴と、「先生」と「K」にみられる関係性を当てはめることで、部屋の間取りで示される従属関係に疑似兄弟の関係性があるとした。〈長男〉の特徴が認められる「先生」を潜在的家長として再構築された〈疑似家族〉は、〈次男〉の特徴が認められる「K」にとつて、安住の地にはなりえないのである。

このようにして『こころ』「先生と遺書」を読むと、欠損家庭であった下宿先から、「家長」を補うようにして再構築された〈疑似家族〉という枠組みの中に「K」は「邪魔者」として存在する。〈疑似家族〉が新たに構築された家庭において、それを率先して行った「先生」は「家長」としての役割を担い、必然的に弟的存在の「K」は「邪魔者」となるのだ。

漱石文学に書かれる「家」の中の「次男」は「厄介者、邪魔者」として書かれることが多く、『行人』での次男である「二郎」は結果として、自ら「家」を出ることを決意する。『こころ』「先生と遺書」で書かれる「K」も例外ではなく、「K」は自ら命を絶つという方法で、再構築された「家」から放逐される。『こころ』における「K」の悲劇は、「先生」

が作り上げた〈疑似家族〉の枠組みそのものに、既に「胚胎」していたと言えるだろう。

## 注

(1) 一九八九年 有精堂出版『漱石の方法』「チャップ台のメタファー」石崎等著

(2) 一九七九年五月 岩波書店『漱石全集 十二巻』夏目漱石著 137 引用

(3) 一九一九年 農業組合中央会『将来之農家』「第六節 長子相続制と徳性」道家齋著 引用

(4) 一九八九年 有精堂出版『漱石の方法』「チャップ台のメタファー」石崎等著 引用

(5) 「食事の時は即ち家族会が開けたのである。所謂、一家族団欒の景色は最も多く食事の時にある。此点から考えれば、食事は必ず同時に同一食事においてにせねばならぬ。食卓といえ、丸くても四角でも大きな一つの台の事で、テーブルといつてもいい、シツポク台といつてもいい兎に角従来の時膳といふものを廢したいと我輩は思ふ。さて、同時に同一食卓においてせねばならぬ。世には不心得なる男子があつて自分は毎晩小宴を張つて、妻には別間でコソコソ食事させる、というような

事をする。是は実に不人情な、不道理な、けしからぬことである。(省略) 早くこの小殿様等を改心せねば平民主義の美しい家庭はとてもできぬ。

(一九三三年 中央公論社『堺利彦全集 第二巻』傍線引用者)

底本 一九〇四年一二月 内外出版協会『家庭の新風味』第五章 内務大臣としての事務(二) 住居の事)

(6) 一九七九年五月 岩波書店『漱石全集 第十一巻』

夏目漱石著 229 引用 傍線 引用者

(7) 一九七九年五月 岩波書店『漱石全集 第十二巻』

夏目漱石著 172 引用

(8) 「大学生の「先生」が下宿したとき、その主人である軍人は日清戦争のときか何かで死んだと駄菓子屋のかみさんは語り、一年ばかり前に市ヶ谷の士官学校の傍のあたりから引越してきたというから、だいたい明治三〇年初頭のころと言つてよ。」

(一九八一年十月 學燈社『國文学 解釈と教材の研究 第26号』「こころ」と明治の終焉」平岡敏夫著 傍線引用者)

(9) 一九七九年五月 岩波書店『漱石全集 第十二巻』

夏目漱石著 22 引用

(10) 『こころ』で書かれる家について考察するにあつて、当時の家制度について調査を行った。『日本の

家族とライフコース』では、家督相続制度は長子単独相続であるため、「長子は「家産」の維持をはかるもの、家成員の統制と扶養義務を持つ存在として位置づけられ強化された」としている。

また当時の民法では、『太政官日誌』の中に、「五十五 養子家族相続布告第一章追加 七月廿日

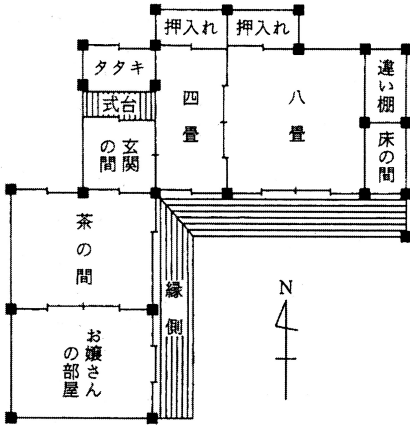
二百六十三号」とあり、明治六年(一八七三年)七月二〇日に家督相続についての布告にある内容が追加されたという主旨が記録されている。そしてこの追加された内容は『法令全書』の中に記述されており、それは、「家督相続は必ず総領の男子たるべし 若し亡没或いは廢疾等止むを得ずの事故あれば其の事実を詳らかにし 次男三男又は女子へ養子相続願ひ出つべし 次男三男女子しか無い者は血統の者を以つて相続願ひ出つべし 若し故なく順序を越えて相続致す者は相當の咎申し付ける事」とあり、出願がなければ長男以外の相続を認めないことが書かれている。

また、当時の長子相続について論じた文献は、長子相続を肯定しているものが多く、否定している

ものは少ない。これらのことから、夏目漱石は長子相続制度の一般化が唱えられ始めた時勢に生まれ、長子、それ以下の子供の立場がはっきりと分かれていた家制度を経験しているといえる。そのため、漱石文学には長子相続に関する家制度が現れているといえる。

(11) 一九八九年 有精堂出版『漱石の方法』「チャブ台のメタファー」石崎等著 引用

(12) 一八八八年六月 桜楓社 五井敬之『漱石研究への道』引用



(13) 一八八九年 大槻文彦発行『日本辞書言海』大槻文彦編

「人家二、家族ノ食事ナドスル室」  
一八九二年 日本大辞書発行所『日本大辞書 第9巻』山田美妙著

「(一) 家族ガ食事ナドスル室。|| 食堂。(二) 其茶ノ間ニイル下女。」

(14) 一九〇九年 博文館『家屋と庭園』「第7節 茶の間」内山正如著 引用

(15) 一九七九年五月 岩波書店『漱石全集 第十一巻』夏目漱石著 161 引用

(16) 一九七九年二月 岩波書店『漱石全集第五巻』夏目漱石著 237~239 引用

(17) 一九七九年五月 岩波書店『漱石全集 第十二巻』夏目漱石著 139 引用

(18) 明治六年(一八七三年) 七月二〇日に追加された家督相続に関する法令の内容に出願がなければ長男以外の相続を認めないという内容がみられた。

(19) 一九九五年 翰林書房『漱石研究 特集 漱石と明治... 漱石と制度』「長男の記号学」著・石原千秋引用

(20) 一九七九年一月 岩波書店『漱石全集 第三巻』著・

夏目漱石 引用

(21) (18) 同様

(22) 岩波書店『漱石全集 第十二巻』164 引用

### 参考文献一覧

一八七三年 太政官『太政官日誌 第99～131号』

一八八七年 内閣官報局『法令全書』

一八九三年一〇月 大川新吉発行『東京百事流行案内』

著・大川新吉

一九五五年五月 有斐閣『日本家族制度史概説』編・中

川善之助

一八九〇年二月 博文館『通俗法律演説』第十席 長子

相続と平分相続と利害を論ず」著・宮川大寿

一九〇三年一〇月 平民書房『家庭雜誌』「偶感 長子相

続法」著・枯川生

一九一一年四月 有斐閣『民法研究』「家族制度卜長子相

続」著・石坂音四郎

一九一九年 農業組合中央会『将来之農家』「第六節 長

子相続制と徳性」著・道家斎

一九八八年八月 至文堂『国文学…解釈と鑑賞』53(8)

「次男坊の記号学」著・石原千秋

一九九五年(通号5) 翰林書房『特集 漱石と明治』「長

男の記号学」著・石原千秋

一九九六年五月 翰林書房『漱石研究』「こころの場所、

家の場所—『こころ』について」著・石崎等

一九九七年 雄山閣出版『全集 日本の文化第9巻』「描

かれた家庭…その食卓」著・前田愛

二〇〇〇年三月 河出書房新社『明治・大正家庭史年表』

編・下川耿史

二〇〇五年 中央公論新社『食卓文明論…チャブ台はど

こへ消えた』著・石毛直道

—あらしき・すずな 日本文学科四年—